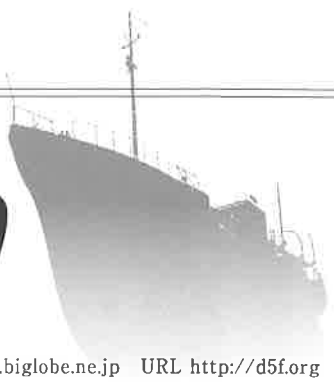


2015.03.01
No.386
(3・4月号)

福竜丸だより

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail: fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



大きいゴジラ 小さいゴジラ (長沢秀之・画)、甲板のレインボーゴジラ



ヒロシマ・ナガサキ70年

核廃絶へ人びとのねがい広がる

被爆70年の今年、原爆がもたらした惨禍をひろげ伝えることに改めて想いを合せます。戦後の核開発、巨大水爆実験の世界規模の被害を考えるとともにアジア・太平洋へと目を向け、戦争による破壊、惨劇をしつかりと刻むための発信をとねがいます。

第五福竜丸展示館では、今年度(ビキニ水爆被ばく60年記念事業)最後の企画展「ゴジラと福竜丸」想像力と現実」を開催しています。

美術家・長沢秀之さんは、「一九五四年ビキニ水爆により大きいゴジラが誕生した、二〇一一年三月一日、福島から小さいゴジラが生まれ、たくさんのゴジラが人びとのなかにある。第五福竜丸という現実とゴジラという想像力が展示館のなかで共振しあう」と述べています。

長沢さんと一緒に製作した学生たちの作品ひとつひとつに今の時代が映し出されます。現在、

過去、戦争、破壊、暴力そして平和。忘却は許されない、むしろ一人ひとりの想像力が過去を現在と将来に活かしてゆくのではないかと。企画展の会期は三月二二日まで(4めに作品の写真など関連記事)。

3・1ビキニ記念のつどいは、二月二八日に開かれ九〇人が参加しました。一般公開に先立ちドキュメンタリー映画『わたしの、終わらない旅』が上映され、監督・坂田雅子さんを迎えてフオトジャーナリストの豊崎博光さんと「核をめぐる旅」をテーマに対談が組まれました(記事2、3めん)。

核を使う者たちが人びとに何をもちらせ続けるのか、私たちが直面する今と重ね合わせながら、ずしりと重い課題を静かに語りかける作品です。

被爆70年の第五福竜丸らしい企画とラッセル・アインシュタイン宣言60年を考え学ぶ企画を構想中です。

3・11ビキニ記念のつどい2015

『わたしの、終わらない旅』

映画上映と対談より

ビキニ水爆から六一年目となる今年の3・11ビキニ記念のつどいは、ベトナムの枯葉剤被害を追ってきたドキュメンタリー映画監督、坂田雅子さんの最新作「わたしの、終わらない旅」の上映、監督とフォトジャーナリスト豊崎博光さん（平和協会専門委員）による対談を行いました。



坂田さんと豊崎さん

この作品は、坂田監督が福

島第一原発の事故をきっかけに核が引き起こしてきたことを問いたい、フランスのラ・アーグ再処理工場やマーシャル諸島、旧ソ連のセミパラチンスク核実験場など、広い視野で核の真実を探る旅路を描き出しています。今回は、核被害の現場を歩いてきたお二人が、映画では描かれていない点などを中心に話しました。

「福島で何が

起こったのだろう」

「3・11」で引き起こされた未曾有の原発事故を前に、現場に足を踏み入れる勇気を持って、悩んでいた坂田さんは亡き母が残した一冊の本を手に取りました。『聞いてください』と題されたそのミニコミ誌が坂田さんを終わらない旅へと誘います。「福島で

何が起こったのだろう、本当に私達は福島で起こったことを知らされているのだろうか。今こそ日本で、福島で起きていることを見なければ」と感じた坂田さんはカメラを片手に福島へと向かいました。

しかし、映画には福島で出会った人びとの映像は出てきません。「視点を引いて見ること、福島で起きた事の本質が見えてくると思った」という坂田さんは、核のもたらす現実を見るために姉の住む英仏海峡のガンジー島を訪れます。原発から出る使用済み核燃料を再処理するラ・アーグ再処理工場の対岸に位置するガンジー島では、工場から排出される放射能による汚染が問題になっていました。

そして坂田さんの旅は「平和利用」と背中合わせの核兵器による被害を追って、被ばく六〇年を迎えたマーシャル諸島、カザフスタンのセミパラチンスクへ続きます。

核実験の実感

放射能の被害は目に見えず、マーシャルでは核実験前

と一見何も変わらない光景が広がっています。マーシャル諸島の島々に生息するヤシガニは人々にとつてのご馳走です。しかし脱皮した殻を食べることにより濃縮が繰り返されるため、安易に食べることはできないといいますが、島の人たちは気にせず食べているようです。

豊崎さんは、六八年に初めてビキニを訪れた際、他の島と特に変わった点は見当たらず、放射能被害の実感はありません。しかし、核実験のスイッチが押されたバンカーは廃墟となりそのままの形で残されています。坂田さんは、当時と変わらない真っさら白砂の海岸に立つと、「核実験による水しぶきが上がり、標的とされた一七隻の戦艦が沈んでいく、その光景がその場所です。起きたのだという実感が湧き、なんとも言いがたい気持ちになりました」と現地での思いを語りました。

さまざまな被曝の事情

マーシャル諸島の人々は、決して現状に悲観してはいま

坂田雅子（さかた まさこ）ドキュメンタリー映画監督
1948年長野県生まれ。2003年、ベトナム戦争に従軍した経験を持つ夫のグレッグ・デイビスの死をきっかけに、枯れ葉剤についての映画制作を決意し、2007年『花はどこへ行った』を発表。2011年にはベトナムの人びとや米帰還兵の枯れ葉剤被害を『沈黙の春を生きて』にまとめ、両作品とも国内外の賞を多数受賞。
第五福竜丸平和協会も協力したマーシャルスタディツアーや研究会にも参加し、交流を深めてきた。

せん。南の島の陽気さは現地映像にも表れています。しかしその裏には目に見えない放射能と身体に現れる影響に翻弄され苦悩する現実があります。今回の映画ではマーシャル諸島についてはビキニ環礁の人びとを取り上げ、ロンゲラップ環礁その他の被ばく者については触れていません。しかし取材を続ける中で坂田さんはビキニとロンゲラップの人びとそれぞれが抱えている事情の違いについて心に残ったといえます。

アメリカは一九四六年から（3めんにつづく）

ビキニ環礁で核実験を実施し、ビキニ島住民は米軍の「メイレイ」により故郷の島を明け渡しました。そのため直接死の灰は浴びていないとされていますが、移住先の無人島での困難な生活を経験し、アメリカの無責任な安全宣言により汚染の残る島に戻って被曝をした人もいます。

一方ロンゲラップ環礁の人びとは五四年のブラボー実験の死の灰を浴び被曝し、甲状腺障害などが多発しました。いずれも放射能の被害を受けていますが、その事情は様々で被曝を一括りにして語ることはできません。

カザフスタンの現状

広島と長崎、ビキニ、福島での被ばくの経験を持つ日本に暮らしていても、世界の核被害について、私たちが知っていることは少ないのが現実です。つどい参加者の感想には、フランスやカザフスタンなどの核被害について初めて知ったというものもありました。七〇年代に少しでも多くの人に知らせたいと声を上げた坂田さんの母の行動は、私

達に事実を目を向けることの重要さを訴えかけます。

カザフスタンは中央アジアに位置し、一九四九年から旧ソ連が核実験を行っていたセミパラチンスク核実験場があります。実験場は四国と同じ程の面積の草原地帯で、八九年までの四〇年間で四七〇回の核実験が行われ、一五〇万人が影響を受けました。首都から核実験場までに点在する村々に住む人たちは、暗く悲哀に満ちており「ソ連が崩壊して核実験の被害の状況がわかるにつれて世界中からジャーナリストが取材に訪れましたが現在ではほとんど訪れません。ジャーナリストに話してもなんの恩恵もなかった。だからもう何も話したくない」と、とてもネガティブでした。」と坂田さんは、マシヤル諸島とは対照的なカザフスタンの人々の現状を報告しました。

核開発の闇

また、近年核実験場の監視が以前より厳しくなり立ち入ると拘束されるなどの事例があると云います。それに対し

海に流れ込む放射能汚染水について話す反核市民活動家ディディエ・アンジエさん（映画より）



豊崎さんからは、プーチン政権になって以降、核関連の取材が難しくなっているという現状も伝えられました。坂田さんと豊崎さん、お二人の話から核開発の闇が垣間見えました。

現在日本はカザフスタンからも多くのウランを輸入しています。また日本の原発の使用済み燃料を再処理しているイギリスやフランスでは「平和利用」という概念は存在せず、軍事として扱われていま

す。「平和利用」という言葉に隠れた核の本質が、この旅路を終わらなきものにしていくように感じずにいられます。

終わらない旅

豊崎さんは、映画や対談を受けて「坂田さんの周りの人々は、みな現場は異なっても繋がっています。お姉さんの住む島の対岸に位置するラ・アグでは日本の原発の使用済み燃料が再処理されています。日本はそこで作られたMOX燃料を輸入し、原発の燃料として使用しています。福島第一原発3号炉ではMOX燃料が使われています。夫のグレッグ・デビスさんは核の被害にあったマシヤル諸島を取材していますし、お姉さんからの手紙をきっかけに活動を始めたお母さんは世界を取り巻いて巡っている核の現実を人々に伝えたいと思い、聞いてください」と訴えていたのだと思えます。」と話しました

それに対し坂田さんは「家族で繋がってきたということが世の中すべてが繋がって

るということだと思えます。福島原発事故に触発されて何がどうなっているのか知りたいと思っても、目の前を大きな岩山が塞いでいて何も見えません。それを少しずつ自分の手元から崩して光が届くようにしたい、そう思って映画を作り始めました。始める前に比べて少しは光が見えてきたのではないかと思います。それでもまだまだ知らなければならぬことがあるので、この映画に『終わらない旅』と名づけました。これからも漠然とした何かではなく、具体的に何をしたいのかと考えて少しずつ続けていきたいと思っています。」と映画の制作に向けた思いを語りました。

*

『わたしの、終わらない旅』（制作・監督・撮影・編集坂田雅子 78分）は、ポレポレ東中野（東京）3月7日〜27日、シネマスコール（愛知）3月21日、ほか大阪、長野などで上映。各地での自主上映会など、詳細は配給・シグロ（電話〇三三五三四三三三三〇一）まで

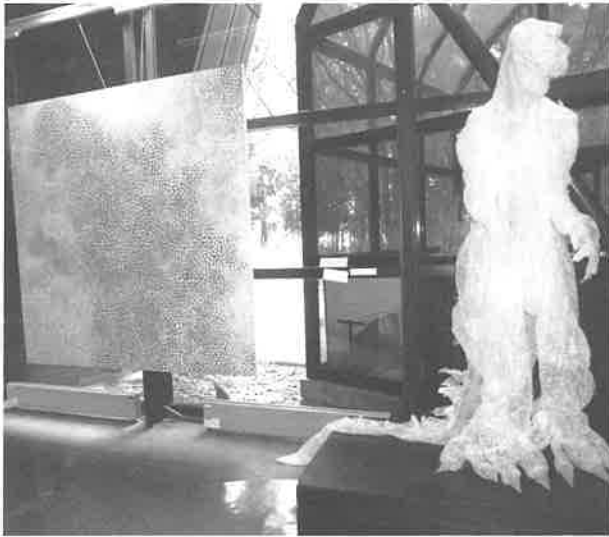
ゴジラと想像力を語る

長沢秀之

アート企画「ゴジラと福竜丸」想像力と現実」のオープニングの催しとして一月二十五日、展示作品の制作・企画をされた長沢秀之さん（武蔵野美術大学教授・画家）と安田和也学芸員のトークがおこなわれました。長沢さんのお話を再構成し掲載します。

なぜゴジラなのか

直接のきっかけは、二〇一一年三月一日の東日本大震災



写真は左上から①黄色いゴジラ（長沢秀之）、ゴジラ着ぐるみ（大山彩綺、大塚裕美佳）、②ゴジラの尻尾（藤田遼子）③ぶらりんゴジラ（望月美由樹）、④腕（飯塚大周）、フィルムとしてのゴジラ（林香苗）

災、原発事故でした。この大災害にアートは何ができるのかできないのか、大きな間に直面したと思いました。私は以前からゴジラの絵を描いたりしていましたが、今回の原発事故とゴジラはつながっているのではないかと、四年に映画「ゴジラ」はつくられたのですけれど、それは戦争の影響もありますが、直接的にはアメリカが行ったビキニでの水爆実験や、その放

射能汚染に見舞われた第五福竜丸の事件の影響が大きかったわけです。



私はこの時代を繰り返すように二〇一一年に再び目に見えない小さなゴジラが無数に発生したのではないかと考え、その問いを学生に投げかけてみました。反響がすごくあり、私はずっとスケッチブックにイメージを提示し、日常で感じる「ゴジラ」的なものを学生たちは次々に描いていきました。これは震災や原発事故後、自分の思いや社会に対し考えていることを絵にぶつけてみようとする気持ちがあったのだと思います。「着ぐるみ」という作品があります。これは梱包用のエアキャップでつくっていききました。学生は中身を詰めて黒く塗る予定でした。でも白

いままのほうがインパクトがある。花嫁衣裳あるいは除染服的なイメージに変えていきました。制作は話し合いながらおもしろい方向を探っていきます。学生はそれぞれ才能があるので、助言があると予期せぬいい作品が実現します。

第五福竜丸での展示

第五福竜丸展示館で展示をすることは大変難しいと思いましたが。なにしろ船の存在自体が強烈です。しかもそのたどってきた現実がさまざまに。こうして実物の船が当時の記憶をとどめるかたちで展示されているのはほとんど奇跡といつていいでしょう。ですから作品の展示でこれに「対抗する」というのは意



味がないと感じました。しかし、ゴジラという想像力のたまものを、現実の証人である福竜丸と対比させてみることは意味がある。重い現実をブレイクスルーするのは想像力です。今ここで船と一緒に作品を展示する意味を感じました。

二〇一一年三月一日に小さいゴジラが無数に生まれましました。それは現代の恐怖そのものです。

作品をつくるということとは個人的な幻想に留まらずに、現実に向き合いそこにささやかな想像力の穴を穿つことにほかなりません。一つひとつの小さなゴジラにそれぞれ縦横に動き回る一人ひとりの想像力で、それは私たちが生きていくうえで欠かせないものでもあるのです。





見学するテンポーさん、ロザニアさん、マーカスさん

アイルック環礁から テンポーさんが来館

二月十九日、マーシャル諸島アイルック環礁からテンポー・アルフレッドさんが姪のロザニア・ベネットさんとその息子のマーカスさんと共に展示館を訪れ見学しました。この日はテンポーさんの七四歳の誕生日。七四年の生涯で、

初めてマーシャル諸島よりも西側に旅したそうです。第五福竜丸平和協会専門委員の竹峰誠一郎さん（明星大学・グローバルヒバクシャ研究会共同代表）の招聘で来日し、静岡・福島等を訪問しました。館内では展示されている地図でアイルック環礁の位置を確認し、たくさんの被災船があつた事実を前に表情を曇らせ、三階のデッキで船の甲板を見ながら、船についてたくさんの質問をされたのが印象的でした。

ブラボーを見た

二一日、明治学院大学国際平和研究所で開催された国際シンポジウム「ビキニ事件」61年〜今をみつめる、核被害の拡がり」で、水爆ブラボーとその後の島のような証言をしました。

アイルック環礁はビキニ環礁のブラボー爆発地点から東南525kmに位置します。一三歳の少年だったテンポーさんは、ほかの男性たちとカヌーで魚を獲りに出かけていたとき、空一面に真っ赤な雲が

広がるのを目撃しました。や



シンポジウムで証言をするテンポーさん

がて轟音が響き、「この世の終わりがきたのかと思った」と言います。仲間のなかには「また戦争が始まった」と思ったり、大変なことになったと讃美歌を歌う者もいました。テンポーさんたちはどこかで身を隠さなくてはならないと考え、近くの岩礁に避難しました。「死の灰（放射性降下物）」は、自分では見えないが島のあちこちに降り積もっているという話を聞いたと語りました。

四環礁神話

米軍兵士が島を訪れ調査をしたが、当時若かったテンポーさんには、その行動の意味

がわかりませんでした。むしろ米兵が子どもたちに配るチョコレートやキャンディに興味津々で後について歩いたと

います。

竹峰さんによると、アイルック環礁にも降灰があり、米駆逐艦レンショーが来てさまざまな調査をしたものの、艦はすでにウトリック環礁の住民を収容しており、アイルックの401人は「多すぎる」と判断し、救助しませんでした。のちに米政府は一連の核実験による被害を実験場となつたビキニ環礁、エニウエトク環礁、死の灰をあげたロンゲラップ環礁、ウトリック環礁の四つに限定しています

が、それはあくまでも「神話」にすぎないとの指摘です。テンポーさんは、自分たちは採血され検査されたが、ケアされることはなかった。なぜアメリカは自国ではなくマーシャルで実験をしたのか、と憤りました。島の人びとには甲状腺異常やガン、皮膚疾患などが多く、動植物への影響も大きいとのこと。

次世代へのバトン

ロザニアさんは、アイルックの人たちに聞き取りをした証言映像を交えて自分の経験と思いを語りました。自分の

母をはじめとする、上の世代の体験は、意識的に聴かなければ途絶えてしまいます。マーカス君も「若いマーシャル人は、こうした事実をまったく知りません」と言い、知ること伝えることを大切にしたいと語りました。

日本人へのメッセージ

それまで英語で話していたテンポーさんが、これはマーシャル語で「私たちは核に向かいつづけなくてはなりません。それは核の苦しみを知らない日本の皆さんもそうだと思います。私たちは同じ苦しみを体験している者どうしとして、団結していっしょに声をあげていきましょう。コモールタタ（ありがとう）」と話しました。

*

一九九八年からマーシャルの調査をつづけ、アイルック環礁の被ばく問題を掘り下げてきた竹峰誠一郎さんが新著『マーシャル諸島 終わりなき核被害を生きる』（新泉社）を上梓されました。展示館ミュージアムショップでも購入できます。

連載②

晴れた日に
雨の日に

山村茂雄

第五福竜丸保存委員会が発足した六九年、また七三年からは平和協会によってビキニ被災関連の催しもたれてきました。第五福竜丸展示館が開館した七六年以後は「3・1ビキニ記念のつどい」が第五福竜丸平和協会の主催で毎年開かれています。

*

ビキニ環礁での水爆実験被災の三月一日を「3・1ビキニデー」とよぶようになってからは、この日を記念して諸行動が行われるようになってからのことです。今では毎年、静岡市や焼津で開かれる全国集会や、六四年からは故久保山愛吉氏墓所、焼津弘徳院での墓前祭（六二年に結成された日本宗平協主催）が開かれ全国各地でも「ビキニデー」の催しもたれています。

ビキニ被災の翌年、一九五五年には名称を「ビキニ被災1周年記念原子戦争準備に反対する集い」として三月十七日に原水爆禁止署名運動全国協議会的主催で開かれています。「原子戦争準備反対」としたのは五五年一月一九日、世界平和評議会が呼びかけたウイン・アピール署名運動にリンクしてのことです。五年は「ビキニ被災2周年記念原水爆実験禁止のつどい」として前年九月に結成された日本原水協と東京原水協共催で東京・豊島公会堂で開かれ一四〇〇人が参加しています。「つどい」には元第五福竜丸乗組員鈴木鎮三さんが参加、ビキニ被災の体験を語りました。広島市や、長野市などでも「3・1」を記念する

催しもたれています。

五七年は、前年明らかにされたイギリスの水爆実験に抗議する「ビキニ被災3周年記念クリスマス島水爆実験阻止中央集会」が、日本原水協主催で前年に同じ豊島公会堂で開かれ、二五〇〇人が参加しました。岸信介首相がメッセージを寄せ、自民、社会、共産の各党代表、インド、エジプト大使も出席しています。五八年は「ビキニ被災4周年エニウエトク水爆実験阻止、アジア・アフリカ共同行動日本大会」として東京・神田共立講堂で開かれ久保山かずさんが挨拶しています。名称が「日本大会」となっているのは、前年一月二十八日から一月一日にかけ四四カ国、一〇〇〇人余が参加した「アジア・アフリカ諸国人民連帯会議」（カイロ）の決議「核兵器反対の共同行動に関する勧告」、「一九五八年三月一日をエニウエトク環礁におけるアメリカの核実験阻止のアジア・アフリカ諸国共同行動日とする」に基づいて準備されたのです。この日、日本全国二六都道府県で集会などの共

同行動が行われています。

*

「カイロ会議」には日本から超党派の五八人の代表団を送り、久保山かずさんは日本原水協代表の一人に加わり参加していました。かずさんは本会議での発言が予定されていましたが「日本代表団の内情」（反対）で発言できないということがおこりました。インドのネール夫人などの提案もあつてかずさんは本会議2日目に発言することになっていたのでした。しかし、「明らかに政府与党（自民党サイドの）政治的考えが圧力として加わり」（日本原水協第四回全国総会議事録）発言ができなかったのです。

記しています（平和協会編『ビキニ水爆被災資料集』収録）。先の日本原水協総会の議事録にもアメリカ大使館、外務省はかずさんの渡航に否定的だったことが議論の中の発言に記録されています。アメリカの影が、かずさんを（福竜丸を）追いかけるのです。会期中、ネール夫人などが呼びかけた「かずさん囲む会」には二〇〇人を超す各国代表が参加しかずさんを励ました。集会の後、かずさんはネール夫人の招待でインドを訪問、ニューデリー市長はじめ各界代表や婦人団体などとの懇談を重ね、水爆実験の残酷さを訴えたのでした。

*

「共同行動日本大会」（58年3月1日）の記念講演は湯川秀樹さんが「人類の問題としての核爆発」と題して行いました。湯川さんは「科学のもたらした危機を取り除くためにいまこそ人間の英知を結集しよう」と語りかけました。会場は三七〇〇人の参加で超満員、立ったまま「おじの話」を聴く小川岩雄さん（後の立教大学教授）の姿もありました。

ビキニ水爆被災から61年、

フクシマ4年のいま

〜見えない放射能に思う〜 大石又七



受賞者による記念写真。右端が大石さん、有園栄子・元東京母親連医院長、中塚明・奈良女子大名誉教授、梅田欽治・宇都宮大名誉教授らと

昨年暮れに、下町人間の会というところから「第二十九回庶民文化賞」という珍しい賞を頂きました。授賞式は浅草寺伝法院大書院で第二部の祝賀会は浅草公会堂で行われました。

先に賞を受けた人たちはみな人間味あふれる立派な方たちばかり、映画監督の今井正、

新藤兼人、山田洋次、作家の井上ひさし、女優では新劇の沢村貞子、乙羽信子、倍賞千恵子、学者や大学教授など知識人がずらっと名を連ねています。

私のような者がこの賞を頂いてよいのか迷ったがこの際ありがたく頂くことにしました。私を推薦してくれた方は六〇年前、ビキニ事件が発覚したこの年、いち早く危険を感じて子どもたちや戦争しない国を守ろうと立ち上げられた日本母親大会の運動の中心の一人、木村康子さんです。母親大会は第五福竜丸の被災を契機に六〇年

間核兵器のない世界を目指して活動を続けています。

木村さんの推薦理由は、私がアメリカのビキニ環礁で行った巨大な水爆実験で被爆した元第五福竜丸の乗組員であること、核兵器や、原発、放射能の恐ろしさを全国の小、中、高、大学生など生徒たちに七百回以上、二十数年間、講演などで語り続けていること、太平洋の海の汚染を後世に伝えるための「マグロ塚」を作ったこと、ノーベル賞作家・大江健三郎氏と「核」について対談したこと、ニューヨークやマニラでの集会で発言したことなどが事細かく紹介されていました。身の引き締まる思いで読みました。脳出血後の麻痺の体があとどれだけでもつかは分かりませんが私の半分は命、四〇、五〇の働き盛りでこの世を去っていった仲間たちの無念を思い、最後まで私は訴え続けま

す。今また福島原発事故で、何の罪もない一二十万もの庶民が先祖代々の大切な土地や家を手放し、見えない放射能や内部被曝におびえながら他県で

慣れない生活を強いられています。NHKの報道によれば事故は世界最悪のレベルだと報じています。津波以外のこれらはみな人が作り出した災害、責任は政治と企業にあると思います。

四年も経つというのに一向に治療も進んでいません。幼児たちの甲状腺ガンの疑いも日増しに聴かれるようになってきています、事故原因もビキニ事件のときと同じように過小評価され大事なところはみな責任逃れで隠されているように思えてなりません。事故の責任を追及して罰しなればまた同じことが起こると思います。

ビキニ事件の時はまだ内部被曝の研究も進んでおらず右往左往したが今は違います。被曝している人たちの検査や治療をしっかりと行って発病して亡くなる人を出さないようにしなければなりません。

福島原発事故が放出している放射能は膨大な量で一昨年九月の発表では「解け落ちた炉心を冷すのに欠かせない地下水が日々四〇〇トン汚染水となつてすでにタンク内に三

三万四〇〇〇トンたまっており、放射能の総計は二京七〇〇兆ベクレルに達する」と言います。

今も雨のたびに地下水にまぎれこみ海に流れだして日本沿岸の海は消えることのない放射能で汚染され続けています。日本は放射能列島化しつつあります。

なのに安倍首相はブエノスアイレス市で「汚染水は福島原発汚染水で完全にブロックされている、健康の影響は今までも現在も、将来もまったく問題ないことを約束する」と述べました。しかし九月五日には東京電力、原子力委員会が汚染水数百トンの海洋流出の事故を「原子力事故の国際評価尺度をレベル三―重大な異常現象」と発表しています。

日本沿岸の魚が安心して食べられ、原発被害で悩み苦しんでいる人たちを置き去りにすることのないよう東京オリンピック事業より先に安心して暮らせるよう一日も早い解決を願っています。私は心配です。(おおいし またしち / 半身麻痺で薬漬けのビキニ水爆実験被爆者、八一歳)

「ゴジラと福竜丸」[X年後] トークセッション開催



2月7日、企画展「ゴジラと福竜丸」の関連イベントとして、映画『放射線を浴びたX年後』の伊東英朗監督（南海放送）と市田真理学芸員がトークセッションを行いました。

伊東さんは、「X年後」に至るまで約10年の調査報道を同名書籍にまとめ昨秋出版しました（講談社）。トークに先立ち映画に描かれた後の取材をまとめた「消えない雨」（南海放送2014年 愛媛県内のみで放送）を特別に上映しました。

展示館では1954年に856隻の漁船が「放射能汚染魚」を漁獲した位置をプロットした太平洋地図を常設展示しています。しかし「被災船」と呼ぶときに、何をもちて被災もしくは被ばくと呼ぶのか今後の検討が必要です。しかも1955年に日米政府による「政治決着」により、それ以降も続けられた核実験被害は検査されず、補償の対象にもなっていません。伊東さんは被害の認定について、少なくとも核実験がおこなわれた期間、死の灰が降下した海域で操業していた漁船はすべて認定すべきだと言います。そのように設定してもなお、そこから除外されてしまう「被害をうけた可能性のある船」があるのが、残念だとも強調しました。放射能「汚染」魚を獲った船＝漁船員が被ばくと言えるのか裏づけるのは現在では困難です。しかし「なぜ被害者自身が自分の被曝を証明しなくてはならないのか。」という、山下正寿さんの言葉を紹介し問題提起しました。

市田学芸員は、近年開示された公文

書について紹介し、「検査当時、急性症状がなかったからといって、被ばくしていないことにはならない。晩発性症状も含め、医学的な検証が今後も重要だ」と指摘しました。

*

2013年11月外務省より開示された資料をきっかけに、2014年9月厚生労働省から公文書が開示されました。外務省文書に収録されていた厚生省資料では固有名詞のみならず、検査項目や数値などがすべて「黒塗り」されていましたが、10月末に追加で開示されました。こうした動きを受け厚生労働省内に専門家による調査チームが設置されました。また水産庁から1月21日資料開示がありました。慰謝料配分に伴う免税措置、1956年のレッドウィング作戦を前に「危険区域」の周知徹底を確認する文書など400ページ余です。今後分析をすすめていきます。

*

岩手県の被災船を調査している吉田栄一さんから、関連資料をご寄贈いただきました。汚染廃棄魚を出した船の関係者から聞き取りをすると共に、県の公文書を調べたところ。「昭和29年水産関係災害報告」に「ビキニ事件」被害補償に対する減税一覧が見つかり、当初船名等が黒塗りされていたものの、厚労省等の資料開示の動きもあり、再請求したところ船名も開示されました。「慰謝料」配分の対象は、廃棄魚だけではなく、危険区域迂回にもなる損失なども含まれています。

BOOK REVIEW

「ビキニ事件の立証～60年ぶりに開示された政府公文書を解く」

1980年代より高知県内外の核実験被災者の調査を続ける太平洋被災支援センターが、新しい資料集を発行しました。開示された公文書の紹介と専門家による分析、これまでの健康調査結果などを収録しています。

『重大な岐路に立つ日本～今、私たちは何をしたらいいのか!』（あけび書房）世界平和アピール七人委員会・編

今年にはラッセル＝アインシュタイン宣言から60年、世界平和アピール七人委員会発足60年でもあります。日本国憲法をめぐる動き、原発再稼働問題、特定秘密保護法や沖縄辺野古への基地移転計画などに対し「重大な岐路に立つ日本」と題した講演会の記録。

来館者の感想より

◇私は今日始めて第五福竜丸にふれました。見たときは思ったよりも大きくてびっくりしました。これから展示を続けてください。（神奈川・11歳）

◇第五福竜丸はゴジラそのものだと思います。

◇署名簿や手紙を見て、平和を思う気持ちは昔も今もかわらないんだなあと思った。（東京・中2）

◇平和がないがしろにされつつある今の時代に警鐘を鳴らす意味でも長く保存していただきたいと考えます。（山梨・60代）

お花見平和のつどい 2015

～ヒロシマ・ナガサキ 70年～

第五福竜丸エンジンの展示館前設置にとりくんだ被爆者、市民団体が記念植樹された桜の木の元で核廃絶と平和をもとめてつどいます。

◆映像とお話「被爆70年ヒバクシャは訴える」「公開から15年第五福竜丸のエンジンのたどった道」ピースミュージック・松島よしおさんほか

4月4日（土）11:00～15:00

第五福竜丸展示館前ひろば

どなたでもご参加いただけます